

その他、基部から刃部にかけて幅を増すものもみられる。形態組成では、分銅形はごくわずかで、短冊形が多数を占める。短冊形には破損品が多いのも特徴である。基部と刃部の間に段を持つ資料の刃部形態は多様であり、幅広い直刃、尖刃、円刃等がみられる。

これらの打製石斧は、ほとんどが縄文後・晩期の土器に伴うものと思われるが、包含層中には、弥生中期～終末期の弥生土器もわずかに認められ、古墳時代中期の土師器も含む。宮崎県域では弥生時代以降にも打製石斧を使用する例が報告されており、本遺跡の包含層出土の石斧にも当該期のものが含まれる可能性も考えられる。今後、遺構出土の資料の検討を経た慎重な判断が望まれよう。

磨製石斧については、ホルンフェルスなどの風化しやすい石材を用いるために、磨製・打製の判断が難しいものもあるが、大半は打製→敲打→研磨と流れる磨製石斧製作の各工程に関連付けた理解が可能である。刃部形態は両刃が主であるが、片面を平坦に仕上げ片刃的な機能を持たせているものもみられる。基部形態は、平面形が丸みを帯びる基部が主体である。その他、いわゆる乳棒状と呼ばれる、尖った基部と厚い円形断面形を持つ資料もある。また、基部形態は乳棒状石斧と共通するが、相対的に薄い断面形が特徴的な資料も目立つ。

打製・磨製石斧のいずれも、包含層中からの資料をみる限りでは、製作跡的な様相を見出すことができる。使用石材としては、小丸川の河床から採取可能なホルンフェルスや頁岩をもっぱらとしており、蛇紋岩などは用いられていない。

他に特筆すべき石製遺物として、石刀などの磨製石製品が挙げられる。天附型、尾畑型のほか、既往の型式に当てはまらない資料も散見される。製作の痕跡と推定される研磨痕を有する剥片も確認されており、遺跡の性格を考える材料となろう。また、肉眼では糸魚川産ヒスイと推定される丸玉1点が新たに検出され、これまでに本遺跡から出土した硬玉製品は計9点を数えることになった。

(文責 嶋田史子)

(3) 小結

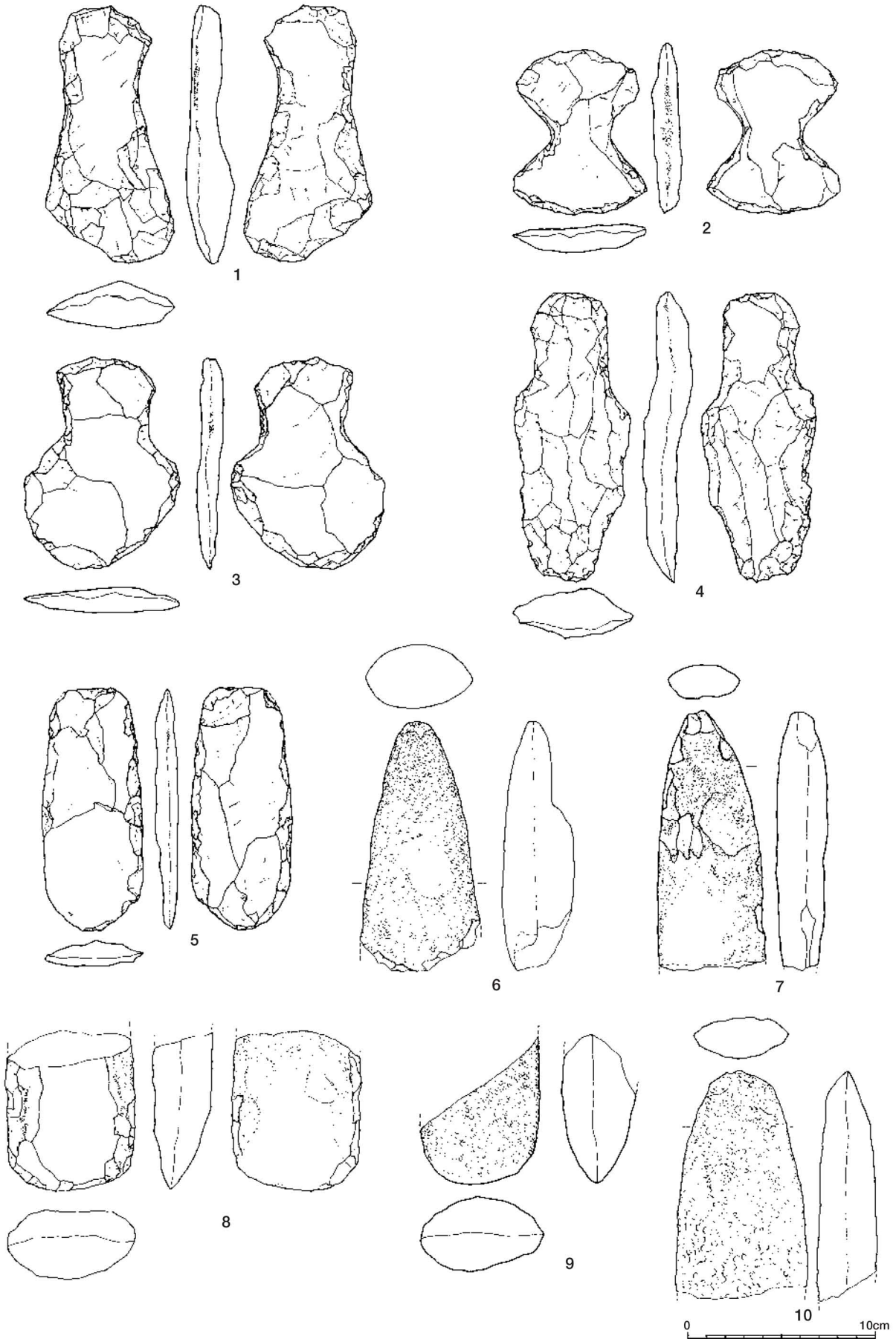
今年度は、旧石器時代包含層を中心に、縄文時代早期に帰属する若干の遺構・遺物を調査した。昨年度までに述べたように、本遺跡では編年的に7大別が可能な後期旧石器時代の石器群が確認されており、これまでの整理作業の過程で抽出された一部の資料について報告をおこなった。今後、接合・母岩別分類作業を通して、遺跡内における往時の人間行動の復元を進める必要がある。

縄文時代早期では炉穴の確認数が増すとともに、礫を伴う環状ピット群の検出が大きな成果といえよう。宮崎県域における早期の竪穴住居検出例の乏しさの説明に、一つの示唆を与える事例といえよう。類例の積極的探索が望まれる。

縄文時代後・晩期では、昨年度までに多量な出土数が確認された石錘、打製石斧、磨製石斧、磨石・敲石について、形態変異の検討、出土量の把握を中心に整理を進めている。大量出土という現象が、遺跡の性格や継続期間などの要因に還元されるのか、他の可能性が考えられるのかといった問題も、今後の大きな課題である。

こうした課題に取り組むための端緒として、今回は出土土器の様相について、早期もあわせて編年の位置付けが可能な資料を抽出し、概要を述べた。整理作業の進捗状況にあわせ、今回は包含層中の遺物の報告にとどまった。今後、遺構出土の資料と照応させた検討を進める必要がある。

(文責 松本 茂)



第30図 包含層出土の打製・磨製石斧 (S=1/3)

64 ひがしうねわら 東畦原第1遺跡 (四次)

(1) 遺跡の立地

三財原段丘面上の緩やかな傾斜地に立地する。標高は約91mで、南西に向かって緩やかに下り、東側には谷が迫っている。

(2) 調査の概要

調査は平成15年8月から始まり、平成15年度はK-Ah (Ⅱ層) 上面、MB0 (Ⅲ層) ~ML1 (Ⅳ層)、Kr-Kb (Ⅴ層) までの調査を行ない、4枚の文化層が確認された。

そして、平成16年度は、MB1 (Ⅵ層) からMB3 (Ⅹ層) まで調査を進め、後期旧石器時代の礫群や遺物を確認した。また、調査区東端の斜面では、新たにK-Ah (Ⅱ層) 上面で中世の道路状遺構4条が検出された。

①後期旧石器時代

MB3 (Ⅹ層) では、礫群1基、大小様々な大きさの礫からなる散礫を検出した。礫群は、掘り込みをもたず、炭化物も検出されなかった。遺物は、ホルンフェルス・流紋岩・頁岩を石材とするスクレイパー・二次加工剥片・剥片・石核の他、砂岩製の敲石・磨石、尾鈴山酸性岩製の台石が出土した。遺物・礫ともに調査区北東部の緩斜面を

中心に出土した。この時代の遺物は、比較的大型で、一部に自然面や節理面を残す剥片や礫塊石器が多い。

MB2下層 (Ⅸb層) では、礫群6基を検出した。いずれも掘り込みはなく、炭化物も伴っていないが大部分の礫が赤化していた。礫群は、調査区北西部の丘陵頂上部から緩やかに下る傾斜地で確認された。礫群の中には剥片や敲石等の遺物を伴うものもある。この他、ナイフ形石器・スクレイパー・剥片・石核・敲石・磨石・台石等の遺物が出土した。また、特に集中する箇所は認められないが、多数出土した礫は散礫と認定した。

AT直下に相当するMB2上層 (Ⅸa層) では、調査区北端に近い東側斜面で、石器ブロックを1箇所確認した。頁岩・流紋岩製の剥片・碎片を中心に約700点余りの石器が集中出土し、小型のナイフ形石器・スクレイパー・石核も含まれていた。この石器ブロック以外にも、剥片等の遺物が出土している。

MB1 (Ⅵ層) では、礫群14基、石器ブロック2か所を確認した。礫群は掘り込みがなく、炭化物も伴わないが、赤化した礫で構成される。石器ブロックは調査区北西の丘陵頂上部付近にあり、黒曜石・頁岩・流紋岩製の剥片・碎片が中心であるが、ナイフ形石器・スクレイパー・台形石器等の製品も確認できた。この他、調査区南端を除くほぼ全域から角錐状石器・剥片・石核・敲石・磨石



第31図 調査区と周辺地形 (S=1/4000)



写真23 MB1遺物・礫出土状況（南から）



写真24 MB2遺物・礫出土状況（西から）



写真25 MB2礫群（南から）



写真26 MB3礫群（南から）

などが出土した。

②中世

調査区東端の斜面では、K-Ah（Ⅱ層）上の黒色土中から合計4条の硬化面が確認され、隣接遺跡の既調査成果等も参考に道路状遺構と判断した。遺構の中から遺物等は出土しなかったが、埋土中に高原スコリア（Kr-Th）を含む層を挟んで上層に2条、下層に2条硬化面が検出されたことから中世の遺構と考えられる。

（3）小 結

本遺跡は、後期旧石器時代から縄文時代草創期・早期、さらに中世前後の遺構や遺物が確認され、長い年月の間、人々の営みが続いていたと考えられる。特に、後期旧石器時代の遺物がAT直下のMB2上層、及びATの上層にあたるMB1からKr-Kbにかけて重層的かつ集中出土したことは注目される。出土したナイフ形石器・角錐状石器・ス

クレイパー・台形石器などは、同一石材の剥片・破片を周辺に数多く伴うものや、製作途中で遺棄されたと推察される未製品も含まれている。これらのことから、本遺跡はこれら石器の製作跡である可能性が高い。また、石器石材の多くは在地産のものである中、黒曜石等の遠隔地石材も含まれ、当時の石器石材の流通状況を推察する資料の一端とすることも今後可能であろう。

調査区東端斜面に確認された中世の道路状遺構は、近隣遺跡の調査結果をふまえ、本遺跡との関連性をさらに検証していきたい。

（文責 大山博志）

71 ^{かんだいじ} 勘大寺遺跡 (二次)

(1) 遺跡の立地

勘大寺遺跡(二次)調査区は鬼付女川の右岸、標高約87mの三財原段丘面上に立地する。北側は平成14年度に確認調査を行った一丁田遺跡と近接し、谷を挟んだ南側の台地上には永牟田第1・第2遺跡が立地する。調査区中央を尾根とし南側は南東方向、北側は北東方向に傾斜し、調査区北端部よりさらに傾斜が急になる。また、調査区より約30m北に湧水地点が存在する。

(2) 調査の概要

一次調査で遺跡南側のA・B区の調査を行い、今年度はC・D区の調査を行っている。調査区の中央東西方向に一ツ瀬川パイプラインが埋設されており、北側をC区、南側をD区と設定した。調査工程上D区より調査を開始し、C区は現在表土剥ぎを終了した段階である。

D区は畑地に伴う造成などのためMB0中部からKr-Kbを含む層中部まで削平を受けていた。町道新田原川床線の反対側である平成14年度に本調

査を行った調査区では道路状遺構が検出されているため表土直下にて遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。MB0(IV層)より縄文時代早期と思われる遺物やKr-Kbを含む層(V層)・MB1(VI層)・MB2(IXa層)・MB3(IXb層)より後期旧石器時代の遺物等を確認している。C区は表土剥ぎの結果、北側斜面際にK-Ah(II層)の残存を確認した。尾根付近ではMB0該当層から礫の出土もみられる。

①後期旧石器時代

V層より剥片等が出土したが出土量は少ない。VI層より、剥片尖頭器・ナイフ形石器・三稜尖頭器などが出土しており、石器製作ブロック・礫群を検出している。石器製作ブロックと礫群は分布が重なる傾向にあり、礫群よりやや離れた箇所では炭化物集中部を数箇所検出している。

また、AT下位の暗色帯であるIXa層より剥片等が出土しIXb層より磨石・敲石類が出土しているが出土数は少ない。イワオコシ上部まで一部掘り下げを行ったが遺物・遺構は確認できていない。

②縄文時代早期

D区の出土遺物は石鏃1点と石核1点のみである。V層上面で遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。C区ではK-Ahが堆積している箇所



第32図 調査区と周辺地形 (S=1/4000)

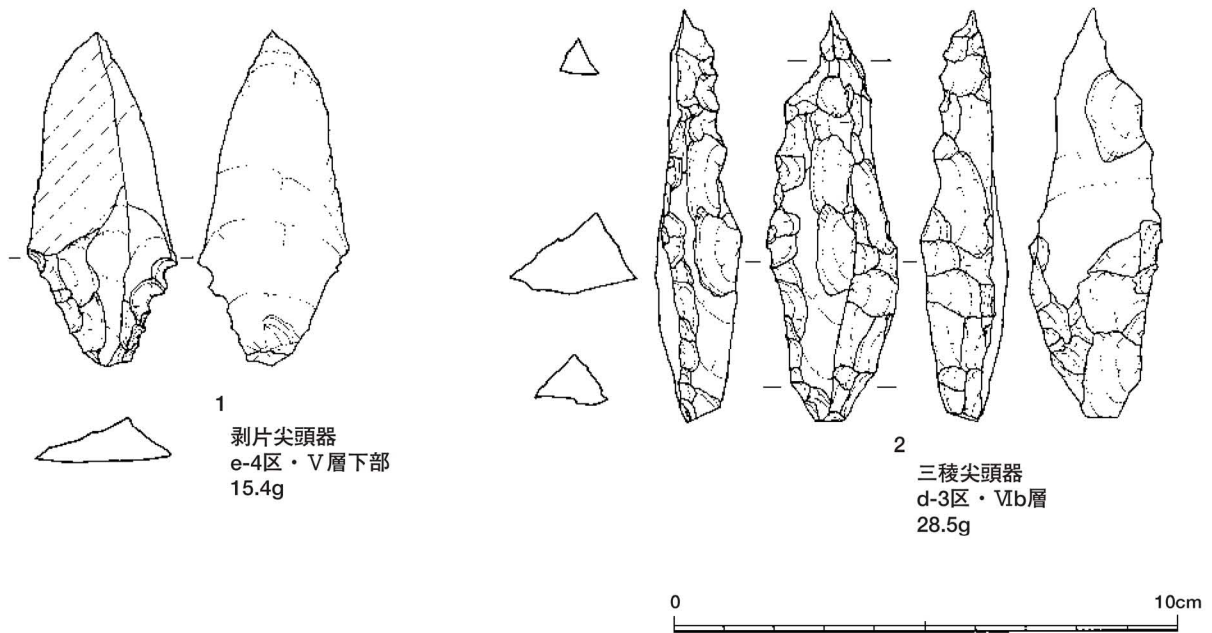
D区より良好な出土が期待できる。

(3) 小結

現段階ではⅥ層での遺物出土が最も多くみられる。石器製作ブロックも数箇所確認されているがⅥ層上部から出土のピークが見られるものとⅥ層下部から見られるものが存在する。ナイフ形石器や三稜尖頭器・剥片尖頭器など器種もバリエーションがあるため時期差を考慮して整理作業など行うべきであろう。

また、礫群と石器製作ブロックの分布が重なり、

炭化物が集中する範囲とやや離れる傾向がみられる。ブロックの中には製品もみられ、礫群は破碎したものが多く小片が主体を占めるが1～2点の小児頭大の礫が含まれるものが多い。今後、接合などの作業を行いながら関連性を検討していきたい。(文責 立神勇志)



第33図 V・Ⅵ層出土石器 (S=2/3)

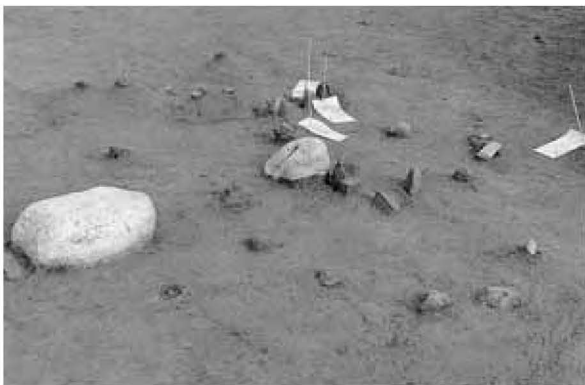


写真27 礫群検出状況 (南から)



写真28 遺物出土状況 (南から)

74 おこばる 尾小原遺跡 (三次)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は新田原段丘面から南西部に張り出す尾根上に立地する。この尾根から西に派生する小尾根が今回調査対象地である。この小尾根は西に向かって緩やかに傾斜し、調査地中央で平坦になる。この平坦面は西南方向に若干広がりながら更に西側の谷に向かって急傾斜する。また、調査地西南部分には開析谷がある。標高は斜面の最高所が約70m、平坦部は約60mである。

(2) 調査の概要

今次調査区の基本層序は、表土 (I層)、黒色土 (IIa層)、黒褐色土 (IIb・IIc層)、K-Ah腐植土層 (IIIa層)、K-Ah一次堆積層 (IIIb層)、MB0 (IV層)、ML1 (V層)、Kr-Kb (VI層) である。

① 縄文時代早期

現時点で、ML1上面から散礫、集石遺構34基、土坑1基そして石器製作跡2箇所が検出された。散礫の下にも遺構は存在すると考えられるので、遺構数はさらに増えると思込まれる。また、石器製作跡はチャート・黒曜石の碎片約70点が約5m

四方の範囲内に集中する状況であり、調査区内で石器製作跡は南側、散礫及び集石遺構群は北側とわかれて分布していた。

遺物は、散礫中から礫と混在した状況で出土した。土器は塞ノ神式・辻タイプが少量確認されたが大半は下菅生B式・田村式などの押型文土器である。石器類は黒曜石・チャートの石鏃、ホルンフェルス製磨製石斧、頁岩・ホルンフェルスの製剥片類が出土した。

② 縄文時代晩期

K-Ah腐植土層上面で集石遺構1基を検出した。礫の範囲は60×50cmで掘り込みはない。礫は全て拳大かやや大きい扁平な砂岩で、被熱により赤化していた。礫の一部は接合可能であり、被熱の際、砕けたものと思われる。遺構に伴う遺物はないが、周辺より孔列文土器が出土したことから縄文時代晩期の遺構と考えられる。

(3) 小結

今次調査では前回までの調査とは対称的に、縄文時代早期の遺構・遺物を主に確認した。特に集石遺構と石器製作跡は概ね押型文土器の時期と考えられる。また両者の分布は重複しないことから、空間利用の在り方を考える良い資料と言えらう。
(文責 岡田 諭)



第34図 調査区と周辺地形 (S=1/4000)

77 藤山第1遺跡 (二次)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、新田原台地の南西部、台地の縁辺部に広がる丘陵と藤山川流域沿いの低位段丘面に位置する。調査区は町道祇園原向原線に面しており、東側に約10m下った地点に藤山川が流れる。台地は小河川による浸食を受けており、開析谷が広がっていたとみられるが、土取りやため池の建設などによって、地形は改変されている。

(2) 調査の概要

平成14年度に実施した第一次調査において縄文土器が出土した。そのほとんどが流れ込みとみられ、北側の丘陵部に集落などの存在が考えられた。そこで本年度に確認調査を畑部分と北側の丘陵部で実施し、いずれもK-AhとKr-Kbを含む褐色土が残存していることが確認され、焼けた礫が出土した。この結果、集石遺構または礫群の存在が予想され、調査区を北側の丘陵部まで拡張した。調査区を便宜上、畑部分をA区、丘陵部をB区と分けて報告していくことにする。

①後期旧石器時代

B区の尾根部では、一部でATが確認されたが、

その他の調査区では確認されなかった。遺物としては、AT下から剥片や台石が出土した。礫群などの遺構は検出されなかった。

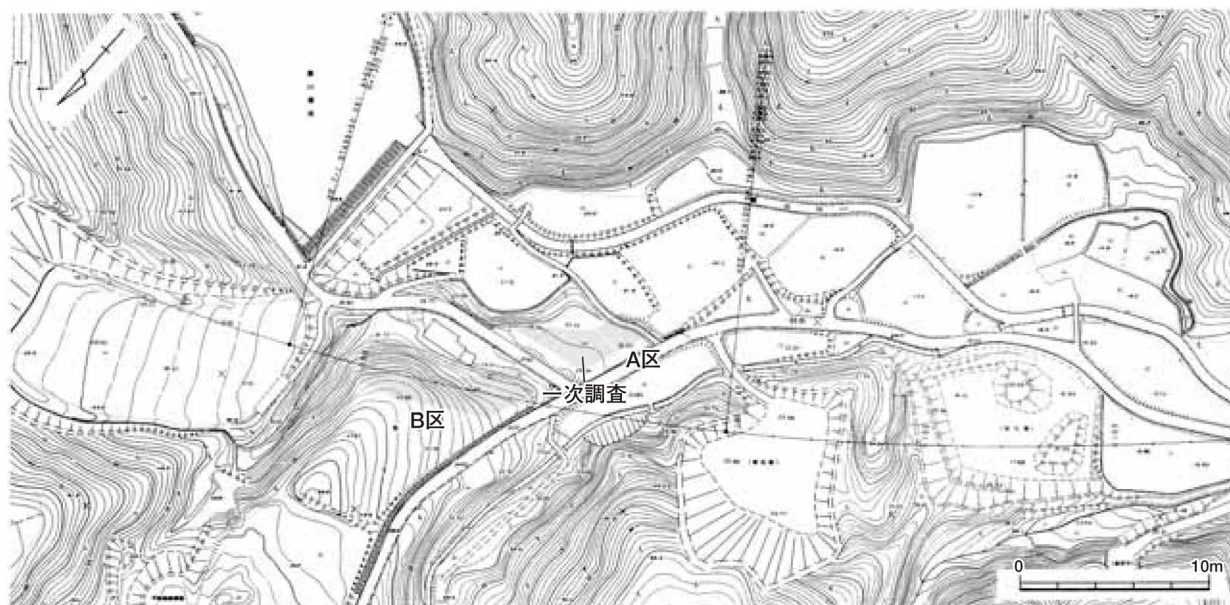
②縄文時代早期

A区の南側で18基、B区の頂上部で12基、尾根部で10基の集石遺構を検出した。いずれもK-Ahの下から検出されて、時期としては縄文時代早期とみられる。集石遺構は、散礫とよばれる5cmほどの小型のものから拳大の礫が、ある程度まとまっている状態で検出され、その礫を取り外したところ集石遺構が検出された。集石遺構からは押型文系や貝殻文系に属する土器が出土している。

A区の集石遺構は、拳大の礫が目立つ。石材としては砂岩やホルンフェルスが多く、ほとんどが被熱している。集石遺構はほとんどが掘り込みをもつが、配石をもつものもたないものがある。遺物としては、押型文系の土器が出土している。

B区の頂上部の集石遺構は、数10cmの小型の礫と拳大の礫からなり、石材としては砂岩とホルンフェルスが多く、ほとんどが被熱している。掘り込みは比較的浅く、配石をもたないものが多い。遺物として、上部の散礫中から貝殻文系の土器が出土した。

台石とみられる人頭大の礫が3個配置される箇所を中心に集石遺構が配置されているのが注目できる。



第35図 調査区と周辺地形 (S=1/4000)

一方、同じB区の尾根部では、削平のため一部礫が失われていたが、集石遺構は拳大の礫が多く、掘り込みをもつものが多い。なかには、すり鉢状に礫が配置された集石遺構も検出された。石材は砂岩やホルンフェルスが多く、ほとんど被熱している。出土した遺物は、押型文系の土器である。

遺物は、貝殻文系と押型文系の土器と、黒曜石製やチャート製の石鏃、敲石、磨石、台石、石皿などの石器が出土している。

その他、A区の東側の調査区から、時期不明の土坑と、B区の頂上部で時期不明の竪穴状遺構が検出された。

A区の東側の調査区で、縄文時代後期の土器が出土しているが、旧地形が谷地形であることから流れ込みとみられる。

(3) 小結

本遺跡は、後期旧石器時代から縄文時代までの遺構と遺物が確認された。特に、集石遺構が40基検出されており、縄文時代早期が中心の遺跡といえる。

縄文時代早期の集石遺構を検出した調査区は、A区が標高約25m、B区の頂上部が標高約40m、尾根部が標高約30mである。特にB区の丘陵では、平坦な箇所集石遺構が検出された。出土した遺物から時期的な差が推定できる。縄文土器において、貝殻文系の土器が押型文系の土器よりも古いとされていることから、B区の頂上部の集石遺構がA区とB区の尾根上の集石遺構よりも先行するとみられる。

これからの遺物の整理や遺構の検討によって、本遺跡の性格などが明らかになっていくであろう。

(文責 小山 博)



写真29 B区尾根部集石遺構検出状況(北から)

79 みやのひがし 宮ノ東遺跡

(1) 遺跡の立地

本遺跡は一ツ瀬川右岸の低段丘上に立地する（第36図）。標高は約32m、河岸低地との比高差は約22mをはかる。本遺跡から北へ一段上がった新田原台地には新田原古墳群が展開し、その中に祇園原・春日遺跡といった縄文時代後期～古墳時代中期の遺跡が点在している。また、本遺跡から一ツ瀬川をはさんだ平野部には、日向国府と比定される寺崎遺跡があり、その後背丘陵には西都原古墳群が展開する。

中世関連遺跡として、本遺跡北側に谷をはさんで有峯城があり、さらに本遺跡からは伊東氏の本拠地、都於郡城を南にのぞむ。一方、本遺跡下段には、現在、水田として利用される氾濫原が広がり、その微高地上に古墳時代中期～古代・中世の竹瀝C遺跡が所在する。

(2) 調査の概要

本遺跡は、里道が横切る丘陵平坦面とそこから上がった痩せ尾根と谷で構成され、丘陵平坦面には住吉神社を含む集落が、昭和50年の自衛隊新田原基地関連による集団移転まで広がっていた。

調査区は、丘陵平坦面については里道を境に南側をA区、北側をB区、痩せ尾根と谷をC区とし、

さらに住吉神社跡地をB2区、それ以外をB1区と細分した（第37図）。本年度はA・B1・C区を調査した。

調査にあたり、特に古墳時代～古代・中世以降の遺構群が調査区ほぼ全面に濃密かつ重層的に分布し、複雑な切り合い関係をみせ、遺構検出は困難をきわめた。平面精査を中心に補助的に遺構壁面・トレンチ断面等を確認しつつ実施し、掘削・記録はグリッド単位で進めた。また、発掘作業員等を対象に説明会等を適宜開催し、好評であった（写真37）。

なお、各時代の主な遺構・遺物等については表6のとおりである。

①旧石器時代～弥生時代

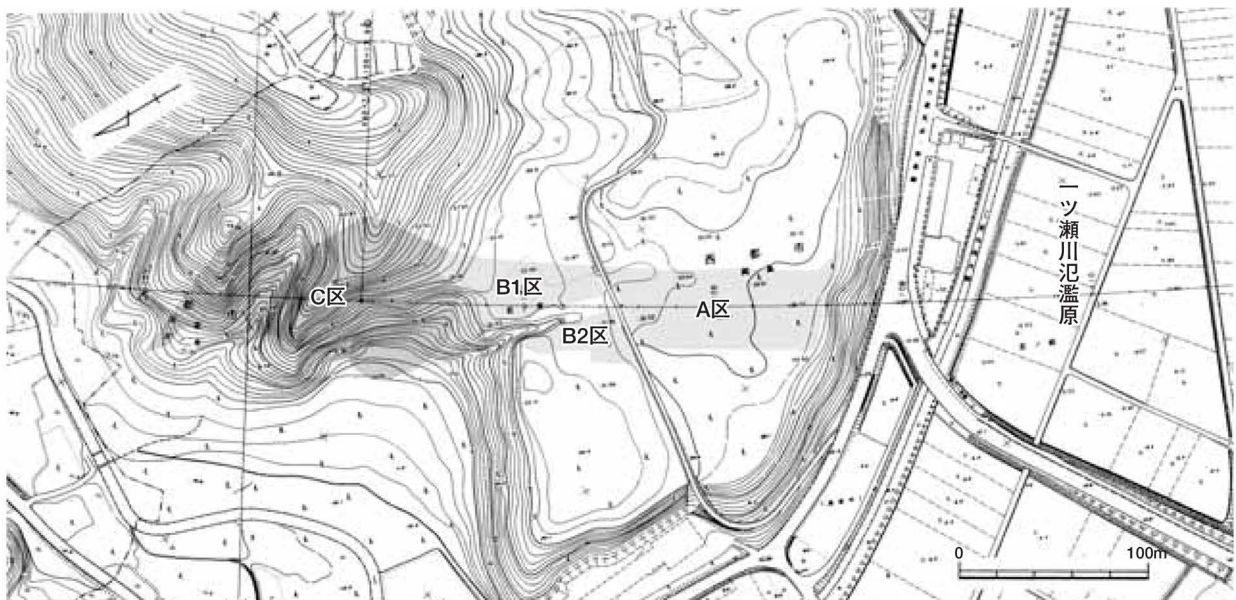
遺構は後世の遺構に削平をうけ、検出数が少ない。

②古墳時代～古代

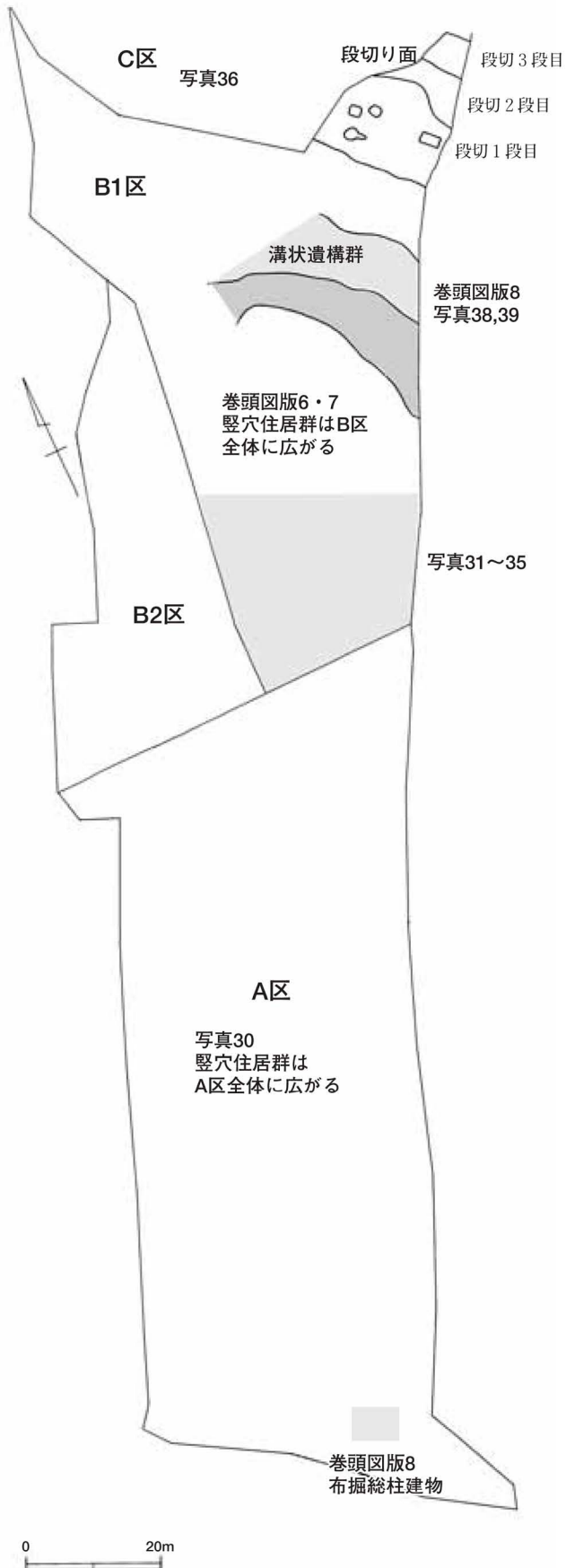
〈住居群〉A区およびB区、ともに濃密に切り合う竪穴住居群が検出された（巻頭図版7、写真30）。現在までに竪穴住居は約400軒を数える。

その検出状況は重層的であり、まず8～9世紀代の竪穴住居があり、その下層に6～7世紀代が、さらにその下層に5世紀代の遺構群が展開する。

特徴的なのは、火処のあり方で、竈は5世紀後半の竪穴住居に付設されはじめ（写真31）、8・9世紀代には2基備える場合もある。また、土器埋設炉は6～9世紀代でみられ、単独ないし竈と併設する。



第36図 調査区と周辺地形 (S=1/4000)



第37図 遺跡全体模式図



写真30 錯綜する竪穴住居群 (A区 古墳~古代)

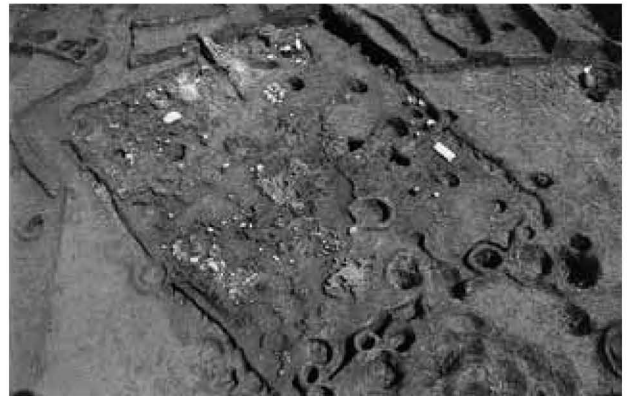


写真31 5世紀代の焼失住居 (B1区 竈付)



写真32 7世紀代の竈 (B1区)



写真33 掘り方方形の側柱建物 (B1区 7~8世紀)

時期	遺構	出土遺物
旧石器 縄文	竪穴住居	ナイフ形石器、角錐状石器、剥片、赤化礫 早期・後期土器、土製品（土製加工円盤、土器片） 石器類（打製石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、石ノミ（蛇紋岩）、打欠石錘、切目石錘、円盤状石器、敲石・磨石、砥石、軽石等）
弥生	竪穴住居、土坑	中・後期土器（絵画土器含む） 石器類（磨製石鏃、磨製石斧、磨製石包丁、打欠石錘、敲石・磨石、台石）
古墳 ～ 古代	竪穴住居、掘立柱建物、土坑、ピット群 造成	土師器（黒色土器、布痕土器、ミニチュア土器含む） 土製品（管状土錘、瀬戸内型土錘、支脚、鞆羽口）、須恵器（円面硯含む） 石器類（打製石斧、敲石、磨石、台石） 石製品（石帯、管玉、有孔製品、紡錘車、軽石） 金属製品（耳環、刀子、鉄鏃、鉄滓） 軒平瓦、朱玉
中世 ～ 近世前半	竪穴状遺構、溝状遺構、道路状遺構、掘立柱建物、土坑、土壙墓、ピット群 段切面、石組遺構、石敷遺構、礫・炭を含む土坑、	土師器（焙烙含む）、穿孔ある土師皿 貿易陶磁（青磁、白磁、青花） 国産陶磁（東播系須恵器、渥美系、備前、瀬戸） 土製品（管状土錘、男根状製品、粘土塊） 石製品（墨書ある凝灰岩片、線刻ある礫、五輪塔（凝灰岩製、化石含む砂岩製）、板碑、板碑転用品、砥石、台石、軽石） 金属製品（銅椀、銭貨、刀子、鉄滓） 布目瓦
近世後半 ～ 近現代	溝状遺構、掘立柱建物、素掘小溝 神社 防空壕、爆弾破裂痕	陶器（肥前系、薩摩焼、在地系） 土器・土製品（焙烙、管状土錘、人形） 石製品（硯、墓石、挽臼、茶臼、火打石、おはじき、鉄丸石） 鉄製品（釘、鋸、蹄鉄、簪、刀子、鉄滓） 銅製品（銭貨、銅椀、キセル、弾丸） ガラス製品（薬瓶、化粧品瓶、飲料水瓶、ランプ） 瓦、瓦玉

表6 宮ノ東遺跡 遺構・遺物一覧表



写真34 竪穴状遺構（B1区・中世）



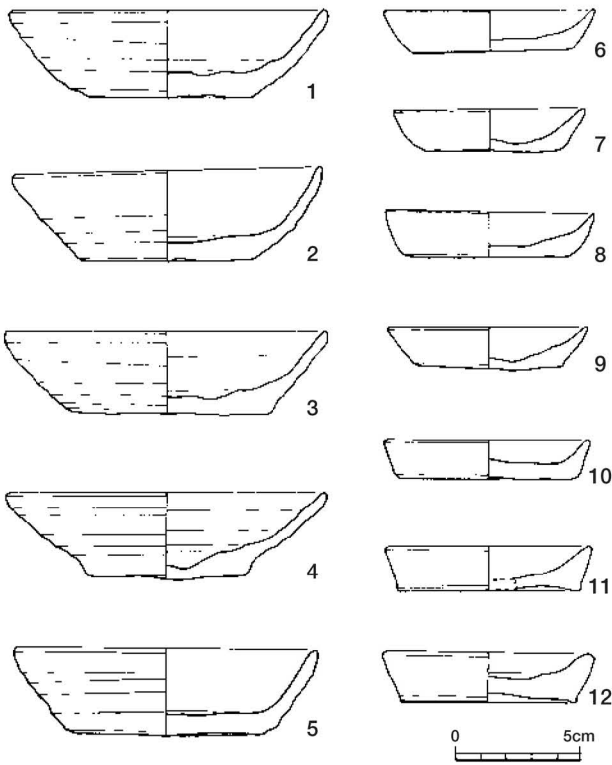
写真35 土壙墓（B1区・中世）



写真36 C区斜面地の調査



写真37 熱心に聞き入る作業員（竈を囲んで）



1~4,6~9はへら切り 5,10~12は糸切り

第38図 山手溝状遺構群一括資料 (B1区 S=1/3)

一方、地床炉を持つ古代の住居も存在する。なお、5世紀代の焼失住居が2軒検出された(写真31)。

〈掘立柱建物〉掘立柱建物を構成するピットは、多数検出された。これらの掘立柱建物は、古墳時代を含め、各時代にわたり調査区全面に展開していたと考えられる。掘り方に注目すると、方形や布掘り状を呈するものがみられた(巻頭図版8左上・写真33)。

〈B1区造成〉谷部を埋める造成が確認された。造成土は谷側の急斜度の壁面を埋めるように堆積する。造成土中に、Kr-Iwブロックや8世紀末~9世紀前半までの遺物が含まれる。この造成面上に、9世紀前半の竪穴住居群が展開する。なお、造成地付近では地山が崩落した箇所が検出された。このことから、9世紀代に谷側が大きく地崩れを起こし、谷側の集落範囲が失われ、その集落範囲の回復もしくは拡張等を目的に崩落土等を用いて埋め、再び集落を形成したと考えられる。

③中世~近世前半

A・B1区とB1区の山手側で集落・墓域のあり方が異なる。まず、A・B1区は溝状遺構、掘立柱建物、竪穴状遺構(写真34)、土墳墓(写真35)が広がる。



写真38 溝状遺構群 (B1区山手)



写真39 溝状遺構群に投棄された坏・皿

一方、B1区山手側は溝状遺構群(写真38)によって独立した空間となる。B1区山手側斜面の遺構面は、西に面する斜面を2~3段に段切りされたものである。この段切面は、東西に調査区外に向けてのびる。

溝状遺構から上がった段切面1段目には、ピットが散漫に分布し、石組土坑や石敷土坑(巻頭図版8下)及び礫や炭化物を多く含む土坑が段切面の方向に主軸をそろえ直線的に配置される。他方、2~3段目にはピットはなく、五輪塔と板碑の集積、集石墓があるのみである。なお溝状遺構群の埋土中から土師器坏・皿の良好な一括資料が出土した(第38図・写真39)。

これらの状況からB1区の山手側は、各遺構の時期は異なるが継続して営まれる、A・B1区とは空間を異にした葬祭の場であると想像される。

④C区の概要

C区では、古代の整地層が確認され、整地面には二段掘りの土坑が複数検出された。また、整地層を覆う包含層上面では、集石墓、皿状のくぼみ等が確認された。竪穴住居等はみられず、A区・B区とは様相が異なる(写真36)。

(文責 竹田享志)

第Ⅳ章 まとめにかえて

第1節 旧石器時代

本調査・確認調査を実施した21遺跡中、旧石器時代の遺構・遺物の確認は12遺跡を数える。ただし、原位置から遊離した遺物の出土事例が目立つ。市納上第3遺跡では、急斜面に設定したトレンチの小礫混じりのローム層から、技術・形態的には旧石器時代の所産と思われるスクレイパーが出土したが、他には当該時代の遺物がみられない。隣接する市納上第2遺跡（本調査実施予定）では、当該期の遺物・遺構が一定量確認されているため、その流れ込みの可能性も指摘できる。その他、天神本第2遺跡（MB0下部）と国光原遺跡（ML1～MB1）では細石刃石器群が、市納上第1遺跡（ML1相当層）と中ノ迫第3遺跡（MB1～ML2）ではナイフ形石器や当該時代と思われる剥片などが、断片的ながら出土した。西ノ別府遺跡ではML1相当層から礫群1基を確認したが、他の遺物・遺構はみられない。

上記した諸遺跡は、いずれも小規模なブロックのみが展開する空間である可能性があるが、周辺も含めた立地を考慮した評価が求められよう。その他、宮ノ東遺跡では、旧石器時代遺物が後世の包含層に混じって出土した。

遺構・遺物が一定の規模で確認されたのは、中ノ迫第1遺跡・野首第2遺跡・東畦原第1遺跡（四次）・勘大寺遺跡の各遺跡である。いずれの遺跡においてもATをはさみ上下から遺構・遺物が確認された。

AT下位では、黒色帯（MB2・3）からの出土が主体であり、その下位（ML3）では遺物・遺構の検出はない。出土層準をもとに、①黒色帯下部（MB3下部）、②黒色帯上部（MB2下部～MB3上部）、③AT直下（MB2上部）の三群に大別できる。

①群では、東畦原第1遺跡から、広範囲に散在する礫群と、スクレイパーや二次加工剥片、敲石や磨石、台石などの礫塊石器類が出土した。野首第2遺跡・勘大寺遺跡においても、散在する礫群を欠くものの、石器の器種構成には、定型的利器

の乏しさや礫塊石器の卓越などの共通点を見出せる。

②群では、東畦原第1遺跡から、ナイフ形石器やスクレイパー、礫塊石器類が、礫群を伴って出土した。中ノ迫第1遺跡・野首第2遺跡からも、礫群を伴う遺物集中部が確認された。

③群では、野首第2遺跡からナイフ形石器や台形様石器、剥片・石核類が、東畦原第1遺跡からもナイフ形石器やスクレイパー、剥片・石核類が出土した。いずれも礫群を伴う。

AT上位では、出土層準をもとに、④AT直上（ML2～MB1下部）、⑤小林軽石下位黒色帯（MB1中～上部）、⑥小林軽石（Kr-Kb）、⑦小林軽石上位ローム（ML1）の四群に大別できる。

④群では、野首第2遺跡から、ナイフ形石器、剥片・石核類が出土した。礫群を伴う。礫群の確認基数に比較して石器類の出土量は少ない。

⑤群では、野首第2遺跡から、ナイフ形石器、角錐状石器、剥片・石核類が出土した。礫群を伴う。東畦原第1遺跡では礫群を伴い、ナイフ形石器、角錐状石器、台形石器、スクレイパー、剥片・石核類などが出土した。勘大寺遺跡からも、ナイフ形石器、剥片尖頭器、角錐状石器、剥片・石核類が出土した。礫群を伴う。

⑥群では、中ノ迫第1遺跡から、礫群を伴い、ナイフ形石器、角錐状石器、剥片・石核類が出土した。野首第2遺跡・東畦原第1遺跡からも、同層位から石器の出土がある。勘大寺遺跡では、小形の剥片尖頭器がある。

⑦群では、野首第2遺跡から、細身の基部加工ナイフ形石器や黒曜石を用いた細石刃石器群の出土がある。

以上、出土層準に基づき、①～⑦のグループに整理したが、今後は遺物の垂直移動を考慮に入れ、分析に有意な石器群の単位を設定する必要がある。わけても、AT上位のKr-Kb降灰層準付近では、短期間に石器群の変化が進行し、石器群の特徴と層位とが単純な対応関係にない可能性が高い。より詳細な出土層位の検討と接合作業による検証を要する。

上記の認識を踏まえ、AT上下にそれぞれの課題を提示し今後を期したい。

AT下位に関しては、①群とした石器群と他地域における相当時期の石器群との比較検討を進める必要がある。また、県内において少数ながら確認されている黒色帯下のローム層から出土する石器群との連続についても検討せねばならない。

AT上位に関しては、④群の類例探索と位置付け、⑤～⑦群への石器群の変遷のより精確な把握が望まれる。後者の課題は、宮崎平野部におけるKr-Kb降灰の歴史的意義を問うことにもつながろう。くわえて、C14年代測定事例の蓄積を進めることも、共通した課題といえる。(文責 松本 茂)

第2節 縄文時代

今年度は14遺跡において縄文時代に該当する遺構・遺物が確認された。各遺跡の詳細は本文中を参照していただくとして、本節ではこれら縄文時代に該当する遺構・遺物の総括を時期毎に行いたい。

1. 早期

縄文時代の遺物が確認された遺跡のほとんどで早期に関連する遺物・遺構が認められる。

都農～西都間も調査地が北上するにつれ、出土土器の傾向も漸移的に変化している。その代表的な事例が、一般に鹿児島県ならびに本県南部でみられる貝殻文円筒形土器の減少と、東九州でみられる条痕文土器・無文土器の出土事例増加である。今後、調査地が北上するにしたがって、この傾向は増加すると共に、川南町霧島遺跡のように、無文土器単独で構成される遺跡の存在も十分予想される。

今年度の調査では市納上第1遺跡、中ノ迫第3遺跡、国光原遺跡、藤山第1遺跡から条痕文土器・無文土器が出土している。この中でも国光原遺跡と藤山第1遺跡からは押型文土器が出土している事から、条痕文土器・無文土器との時間的・空間的關係の把握が期待されよう。

また天神本第2遺跡では石器製作跡が検出された。この製作跡では石鏃ならびに未製品が出土しているため、石鏃の製作跡であることが窺える。

本県では塚原遺跡で石斧の石器製作過程が復元された事例があるが、天神本第2遺跡でも今後の分析により、石鏃の製作過程が復元されよう。

早期の遺構として集石遺構・炉穴が大多数の遺跡で検出されている。藤山第1遺跡においては、調査区毎に異なる土器型式が出土し、それに伴う集石遺構が検出されている。単独土器型式に伴う集石遺構の検出事例は稀であるため、集石遺構の形態変遷を追うための好資料となるだろう。野首第2遺跡において検出された環状ピット群は、早期における住居の可能性が指摘されている。早期の定住3要素とされる、集石遺構・炉穴・竪穴住居のうち、本県では竪穴住居が欠落していた。その竪穴住居にかわる住居の可能性もあるが、今後の検出例の増加と多角的な検討による遺構の用途論が望まれる。

3. 前期～中期

前期に該当する遺物として轟B式・曾畑式が、尾花A遺跡、野首第1遺跡で出土している。中期に該当する遺物としては市納上第4遺跡で阿高式系土器が見られるのみである。野首第1遺跡に隣接する野首第2遺跡では前期の遺物が確認されていない事は、当時の景観を考察する上で興味深い。

4. 後期

指宿式が市納上第4遺跡から、後期後半期の土器群が野首第2遺跡から出土した。野首第2遺跡と同様な資料が、宮崎市平畑遺跡や新富町春日遺跡から出土している事から、標識遺跡資料と微妙に異なる属性こそが宮崎平野部における地域性と理解されよう。

今後、野首第2遺跡の遺構出土土器の型式学的分析に立脚した、宮崎平野における縄文時代後期後半期の土器編年が期待される。

5. 晩期

尾花A遺跡、尾小原遺跡で黒川式が出土している。本県の晩期の特徴として、晩期の開始期に該当する遺物はあまり確認されず、後続する黒川式になり遺跡数が増加する傾向にある。一方で遺跡数が増加するにもかかわらず晩期に該当する遺構の検出事例に乏しい点があげられる。この事は東九州自動車道建設に伴う発掘調査でも如実に浮かび上がっている。(文責 重留康宏)

第3節 弥生時代

本年度調査が実施された中で、当該期の遺構・遺物は9遺跡で確認され、台地上に営まれた集落遺跡が多く発見されている。湯牟田遺跡、尾花A遺跡、赤坂遺跡では、20軒を越す竪穴住居が確認された。それらのほぼ全てが後期後半～古墳時代初頭である。

(1) 集落

湯牟田遺跡において、竪穴住居の約半数が、焼失住居である。検出された炭化材は垂木や桁といった建築部材と推定できるものもあり、上屋構造を復元する上で重要である。また、「焼失住居」の要因と背景を全国的規模の成果と連動しつつも、多角的視野で批判的に検証し、結論を求める姿勢が必要となる。さらに、赤坂遺跡でも焼失住居が検出されている。

尾花A遺跡では、終末期～古墳時代初頭の竪穴住居が33軒検出されており、それらは複数の切り合い関係にある。しかし、隣接している同時期の遺跡では、切り合いがなく、単独に散在している。集落のあり方の差異をどう読みとるかについては、同時期の遺構・遺跡間の相関関係を把握することが必要となるのであろう。

市納上第1遺跡では、尾鈴山系から派生した丘陵と台地との境目付近の斜面上に竪穴住居や周溝状遺構が検出され、台地縁辺の集落のあり方を示す好資料となった。

(2) 遺跡間の関係

尾花A遺跡と西ノ別府遺跡は近接し、同一の集落である可能性がある。両者の間には、未調査部分が残っており、西ノ別府遺跡まで集落が広がると想定されるが、今後の調査を待つところが大きい。

湯牟田遺跡と国光原遺跡も隣接している。しかし両者間の比高差が10mと大きく、国光原遺跡では、焼失住居がなく、竪穴住居の内容に違いがある。今後、両者の時間的・空間的関係の検討が求められる。

(3) 集落と墓

赤坂遺跡では、弥生時代終末期の周溝墓と後期後半～終末期の竪穴住居が近接している。周溝墓が竪穴住居群から見上げた丘陵頂部に立地することは、墓域と集落との関連性を考える上で重要な

検出例である。また、周溝墓は県下で今までに7遺跡で検出されている。多くの場合台地平坦面に立地しているが、赤坂遺跡の例は眼下に十文字扇状地を見下ろす急崖にあることは注目される。前期古墳の立地とも共通する部分でもあることから、古墳出現前夜の様相を示す資料となろう。

周溝状遺構は、その検出数が増加してきており、川南町で23例を数える。本年度調査においては、赤坂遺跡や市納上第1遺跡、国光原遺跡で確認されている。周溝状遺構は、その機能等課題が多く、性格づけをめぐって、多角的な検討が必要である。

(4) 遺物

土器については、湯牟田遺跡で竪穴住居から下城系甕が出土し、天神本第2遺跡では須玖式系甕の口縁部片などが出土している。川南町で中期後半の土器が遺構に伴う数少ない調査例のひとつである。

金属製品では、湯牟田遺跡の竪穴住居から鉄鎌・板状鉄斧が出土している。板状鉄斧は朝鮮半島との関係が窺える貴重な遺物である。また、西ノ別府遺跡で竪穴住居から仿製重圈文鏡が出土しているが、古墳時代前半まで下る可能性もある。県内での鏡の出土は7例目であり、住居からは6例目となる。今後、その性格づけが重要となろう。

ほかに湯牟田遺跡の焼失住居で発見された炭化鋤は、同様の検出例は少なく特筆される。

(5) 今後の課題

以上、本年度確認された遺跡についてみてきたが、多くの遺跡で同時期の遺構が検出されている。そこで今後の課題について示していきたい。

各遺構から出土した土器について、詳細な土器編年の構築が必要である。それを踏まえて、各遺跡での遺構の先後関係を検討していくことによって、時期的な変遷が可能となる。さらに、遺跡間での土器の検討を進めることによって、相対関係が明らかになっていくだろう。

本年度確認されたのは、小丸川左岸における台地の末端から中央部、さらには丘陵と台地との境目付近といった立地を示す。集落間のネットワーク、集落の性格（恒常性や臨時性）や役割分担（生産集落・生産遺構）を考慮した調査、整理も必要であろう。

(文責 森本証明)

第4節 古墳時代・古代

本年度、古墳時代・古代の遺構・遺物が確認された遺跡は大内原遺跡・尾花A遺跡・野首第1遺跡・宮ノ東遺跡の4例のみである。

尾花A遺跡では土器埋設炉をもつ竪穴住居1軒が確認されている。住居は埋設された土器の型式から古墳時代中期～後期に属するものと考えられる。西方約1kmには川南古墳群が所在しており、本遺跡との関係が想定される。

野首第1遺跡では古墳群の前方に東西方向にのびる4条の溝状遺構を確認した。いずれの溝も浅く、端には小穴群を伴う。その帰属時期は出土遺物から溝、小穴群ともに野首1号墳とほぼ同時期の7世紀前半頃と考えられ、野首古墳群に伴う墓道であった可能性が高い。また溝に伴う小穴群の掘り込みは約0.5m～0.6mとなり、深いものでは1mほどとなる。このように墳墓に小穴群を伴う類例は県内では高鍋町下耳切第3遺跡、国富町六野原等地下式横穴墓群、えびの市広畑地下式横穴墓群で確認することが出来る。しかし、いずれも地下式横穴墓からの検出であり、小穴の位置や数も異なっているため本例と一括して考えることは困難である。本例と同様の類例は熊本県熊本市にあるつつじヶ丘横穴群で確認することができる¹⁾。

調査報告のなかでは検出された小穴群の多くは柱穴であるとし、墓前における儀礼行為に伴うものとしている。またその配置から門柱状の構造も想定している。安易に野首第1遺跡の小穴群と結びつけることは出来ないが、その配置や1m近く掘り込まれるなど共通する要素も多い。今後はこのような類例を踏まえ、野首古墳群における儀礼行為の復元にむけて検討を進めていく必要がある。

宮ノ東遺跡では5世紀後半から9世紀代にかけての竪穴住居約400軒以上と掘立柱建物群が確認されている。その特徴として検出された竪穴住居は激しく切り合い、重層的に分布することが挙げられる。こうした大規模集落の類例として付近には新富町上園遺跡や竹淵C遺跡が位置する。上園遺跡では古墳時代を中心とした300軒近くの竪穴住居が確認され、竹淵C遺跡でも古墳時代を中心とした竪穴住居群が検出されている。しかし上園

遺跡では6世紀後半以降は集落が衰退するのに対し、本遺跡では7～8世紀に住居数が増加するなどの違いも認められる。

また住居内の火処にも特徴が認められ、竈付住居の出現を早くも5世紀後半から確認することが出来る。これまでに確認された南九州における竈付住居の初現は6世紀後半であり、今回確認された竈付住居はそれを約1世紀も遡ることとなる。

しかし6世紀以降は土器埋設炉が出現し、竈との併設がみられるなど他の遺跡と共通する要素も多い。今後は火処の変遷についての詳細な検討が必要となろう。

宮ノ東遺跡の性格については確定することは出来ておらず、今後の検討課題となる。周辺には新田原古墳群が展開しており、古墳群との関係も想定し得るが、直接的に結びつけるものは確認できていない。7世紀以降に石帯や円面硯、布掘り総柱建物などが確認され、前代までとは異なった様相が現れてくる。このことは古墳時代から古代への社会の変化に連動して、集落の様相の変化を示す一端であろう。今後、詳細な遺物の観察、建物の配置などを検討していくことによって、集落の性格が明確になっていくことだろう。古代の軒平瓦の出土も見逃せない。

最後にこれからの展望を述べて総括としたい。横穴式石室においては近年、野首古墳群や百足塚古墳などで新たに横穴式石室をもつ古墳が確認されているが、それでも横穴式石室研究の素地が整ったとは言えないのが現状である。しかし、今回の野首第1遺跡で確認された溝状遺構と小穴群、それに伴う遺物を検討することにより、石室構造だけではなく墓前儀礼からも造墓集団を検討することが可能かもしれない。今後は横穴墓群も含めた古墳時代後期の儀礼行為の復元が課題となろう。

また集落では宮ノ東遺跡において確認された遺構・遺物はこれまで資料不足であった7～8世紀の土器編年、また南九州における竈の導入を再考しうるものである。今後の集落構造の検討により、本県における古墳時代から律令社会への移り変わりを検討する上で貴重な資料となるであろう。

(文責 三品典生)

註

1) 美濃口雅朗 2002『つつじヶ丘横穴群』熊本市教育委員会

第5節 中世～近世

中世の遺構は大内原遺跡、湯牟田遺跡、宮ノ東遺跡で検出されている。

湯牟田遺跡では、溝状遺構と掘立柱建物、土坑が確認されている。溝状遺構は途中で屈曲するが、直角を描くものではないことや、さほど深くないこと、掘立柱建物が溝の両側に分布することなど、いわゆる方形館とは様相が異なる。浅めの溝状遺構による区画単位が連なる在り方は、川南町前ノ田村上第1遺跡の状況に近い¹⁾。存続年代は12～14世紀の幅におさまるとみられており、今後、画期を捉え、遺構群の変遷について追究する必要がある。

宮ノ東遺跡では地形によって分割された調査ブロック間で様相が大きく異なる。段丘端部に近いA区とB1区では溝状遺構と掘立柱建物、竪穴状遺構、土壙墓が、溝状遺構群で区画された丘陵・斜面地のB1区山手側では、段切面上で石組土坑や石敷土坑、石塔群、集石墓などが検出されている。それら各遺構の年代比定が課題となるが、それを進める上で溝状遺構の埋土中より出土した一括資料は重要である(第38図)。杯と小皿のセットで構成されており、杯には体部が直線的になるものとやや内湾するものという二者が認められる。児湯郡内では中世を通じてヘラ切り底が卓越する状況が指摘されている。本資料は中世末における糸切り底出現期を示すものと評価できよう。

大内原遺跡では土師器皿3点を副葬した土壙墓と目される遺構が検出されている。土師器皿のみでは年代を絞り込むことが難しいが、近くの遺物包含層中より出土した東播系陶器の年代観より、概ね13～14世紀に属する遺構であると推定される。

(文責 吉本正典)

註

1) 宮崎県埋蔵文化財センター『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書、』(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書91)2004

第6節 植物遺存体研究の成果と課題

(1) はじめに

東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う発掘調査において、これまで省みられることの少なかった遺構出土の植物遺存体に注目し、平成15年度から調査の一環として遺構の埋土を採取し水洗する、フローテーション作業を実施してきた。本センターでは本館におけるフローテーション作業及び選別作業と併行して発掘現場においても同様に進めている。(巻頭図版9・10参照)

ここではこれら一連のフローテーション作業の中間報告として、現在までに得られた植物遺存体の検出事例をまとめた上で(表7)、具体的な成果と今後の課題を述べる。

(2) 植物遺存体の検出事例

① 縄文時代

縄文時代早期の陥し穴遺構で検出を試みた結果、数種の人里植物のみにとどまるなか、西畦原第2遺跡(三次調査)の場合、イネ、アワ、マメ科、アカネ科?の栽培植物を少量抽出できた。しかし、共伴して出土した炭化物の年代測定を行ったところ、B P 2290±40の測定結果が示された。この測定結果は陥し穴遺構の年代とは大きくかけ離れることから、埋土のサンプリングの方法や埋没後の混入などの検証を今後行っていく必要がある。

② 弥生時代

向原第1遺跡の竪穴住居よりイネ、ササゲ属、ドンダリの花柱及び付部、キンバイザサ、カラスザンショウ、イヌザンショウや、植物遺存体以外では虫サナギ、虫フンなど多種類にわたって検出した。特に注目すべき点は、県下で初めて竪穴住居から数百点以上のイネをフローテーション法にて検出し、種実同定を行ったことである。

さらに、上記以外にも種類や検出量の増加にも期待できるため、今後種実同定や年代測定を実施する予定である。

湯牟田遺跡では、竪穴住居からイネ、完形のドンダリを検出した。また、前ノ田村上第1遺跡では周溝状遺構からイネ、アワ、コムギを少量検出した。

このように弥生時代における栽培植物の検出事例も徐々に蓄積されている段階といえる。

③中世

野首第1遺跡では、調査区内の谷部の低湿地層からマツ、モモと思われるものを検出している。これまで少なかった中世における遺跡周辺の古環境を推定可能な植物遺存体が検出されたことは特筆できる。

(3) 平成16年度の成果

以上のように各時代において様々な植物遺存体の検出成果を挙げている。これまで調査時には検出できなかった様々な植物遺存体、特にイネやアワ、コムギ、ササゲ属といった栽培植物が遺構から検出できたことは大きな成果である。各時代の遺構を対象とした植物遺存体研究を積み重ねることにより、遺跡や遺構の性格解明へと繋がることが期待される。

また、西畦原第2遺跡の例は、植物遺存体を遺構と同じ時期の所産かどうか判断するには必ず植物遺存体の年代測定の実施、及び遺構周辺の状況を勘案すべき点を示した。

一方、向原第1遺跡のように竪穴住居床面に1mメッシュを切って埋土を採取することで植物遺存体の検出場所をより詳細に特定でき、さらには共伴遺物の位置と比較することで遺構(竪穴住居)の空間利用の復元や環境復元を進めており、単に植物遺存体を検出するだけでなく、今後その評価についても成果を示していきたい。

また、植物遺存体の自家同定はある程度行えるようになってきた。しかし、多くは第三者機関への委託分析が不可欠な段階である。そこで種実同定と植物遺存体の正確な年代の割り出しを行いながら、標本作成を進めている。

(4) 今後の課題

まず、埋土採取から種実同定、及び年代測定までの過程において時間と費用がかかるという点である。この点については網羅的かつ効率的な方法を模索しながら、最大限の情報を得るために上記で述べたような目的意識のある調査及び分析を進めている。

また、これまでのフローテーション作業は調査

担当者によって目的意識や精度が異なる場合が見られた。このため実施される遺跡や遺構に偏りが見られる。従って同じ基準のもとで遺跡・遺構単位でフローテーション作業を行い、その結果を比較できるようにしていくことが必要である。

さらに、蓄積される植物遺存体研究において調査報告書への記載や、教育普及活動などへの活用方法も考えていくべき大きな課題の一つでもある。

(5) 今後の展望

今後の展望としては、これまでに得られた成果やそれに伴って生じた課題を踏まえながら、県下全域において各時代の遺構を対象とした植物遺存体の検出を試みていきたい。その上で遺跡内における遺構間の比較や県下全域における遺跡間の比較、さらには県下の植物遺存体の検出事例を蓄積し、他県で検出される植物遺存体との比較を行っていきたい。そして全時代の県下における環境及び植物利用の歴史の解明に繋げていきたい。

(文責 小宇都あずさ)

遺跡名	所在地	遺構	時期	検出物	点数/重量	形状	種実同定
西畦原第2 (二次)遺跡	新富町	SC1 (おとし穴状遺構)	縄文早期	炭化物	0.1 g	—	—
		SC2 (おとし穴状遺構)		炭化物	0.5 g	—	—
		SC3 (おとし穴状遺構)		炭化物	0.1 g	—	—
西畦原第2 (三次)遺跡	新富町	SC1 (おとし穴状遺構)	縄文早期	炭化物	1.6 g	—	—
				イネ	1点	完形	分析委託
				アワ	1点	完形	分析委託
				マメ科	2点	完形	分析委託
		アカネ科?		9点	完形	分析委託	
		SC2 (おとし穴状遺構)		炭化物	0.5 g	—	—
SC5 (おとし穴状遺構)	炭化物	0.2 g	—	—			
向原第1遺跡	新富町	SA1 (竪穴住居)	弥生後期後半	イネ	406点	完形および復元できるもの	自家同定
				ドングリの花柱	0.6 g	完形 (ほぼ球形)	自家同定/分析委託
				ドングリの付部	1.2 g	完形	自家同定
				植物遺存体	45.4 g	—	—
		SA3 (竪穴住居)	弥生中期後半 (2060±40年BP; SA3のイネ)	イネ	155点	完形および復元できるもの	自家同定
				植物遺存体	4.9 g	—	—
				カラスザンショウ	1点	完形	分析委託
				ササゲ属	2点	完形	分析委託
				アリノトウグサ科?	1点	完形	分析委託
				虫サナギ	1点	完形	分析委託
				虫サナギ?	5点	—	分析委託
		虫フン	2点	—	分析委託		
		中央土坑 ピット	イネ	1点	完形	自家同定	
			植物遺存体	0.3 g	—	—	
		SA5 (竪穴住居)	弥生中期後半	イネ	20点	完形および復元できるもの	自家同定
植物遺存体	1.0 g			—	—		
モモの核	1点			完形	分析委託		
SA6 (竪穴住居)	古墳初頭	植物遺存体	0.6 g	—	—		
		カラスザンショウ	1点	完形	分析委託		
		イヌザンショウ	1点	完形	分析委託		
		イネ	1点	完形	自家同定		
野首第2遺跡	高鍋町	SA9 (竪穴住居)	古墳中期	花序 (種実不明)	1点	完形	分析委託
		SI156 (集石遺構)	縄文早期	炭化物	0.9 g	—	—
唐木戸第1 (二次)遺跡	高鍋町	SC9 (おとし穴状遺構)	縄文早期	炭化物	0.7 g	—	—
		SC10 (おとし穴状遺構)	縄文早期	炭化物	0.9 g	—	—
		SC13 (おとし穴状遺構)	縄文早期	炭化物	0.8 g	—	—
		SC15 (おとし穴状遺構)	縄文早期	炭化物	1.0 g	—	—
		SC17 (おとし穴状遺構)	縄文早期	炭化物	0.8 g	—	—
				植物遺存体	4点	—	—
ヒユ属	1点			完形	分析委託		
アブラナ科	1点	完形	分析委託				
下耳切 第3遺跡	高鍋町	SC42 (土坑) <覆土中>	縄文中期前葉~後葉 (4380±40年BP; イチイガシ)	イチイガシ (コナラ属アカシヤ属?を含む)	約368点	完形および復元できるもの	分析委託
		SC43 (土坑) <覆土中>	縄文中期前葉~後葉 (4430±40年BP; イチイガシ)		約100点	完形および復元できるもの	分析委託
		縄文中期前葉~後葉 (4400±40年BP; イチイガシ)	—	—	分析委託		
野首第1遺跡	高鍋町	谷部の低湿地層	中世 (14~16C)	マツ	11点	完形	自家同定
		モモ?	2点	完形および復元できるもの	自家同定		
前ノ田村上 第1遺跡	川南町	SA1 (竪穴住居)	弥生終末期	植物遺存体	0.6 g	—	—
		SL1 (周溝状遺構)	弥生終末期	植物遺存体	0.5 g	—	—
				イネ	26点	完形および復元できるもの	自家同定
				アワ	3点	完形	分析委託
				コムギ	1点	完形	自家同定
タデ属	1点	完形	分析委託				
湯牟田遺跡	川南町	SA3 (竪穴住居)	弥生後期後葉~終末期	植物遺存体	37点	—	—
				イネ	3点	完形	自家同定
				ドングリ	4点	完形および復元できるもの	自家同定
		SA4 (竪穴住居)	弥生後期後葉~終末期	植物遺存体	2点	—	—
				イネ	11点	完形	自家同定
		SA10 (竪穴住居)	弥生後期後葉~終末期	植物遺存体	259点	—	—
				イネ	32点	完形	自家同定
				ドングリ	37点	完形および復元できるもの	自家同定
		SA15 (竪穴住居)	弥生後期~終末期	イネ	1点	完形	自家同定
				植物遺存体	6点	完形	—
SA20 (竪穴住居)	弥生後期後葉~終末期	イネ	2点	完形	自家同定		
		イネ	1点	完形	自家同定		
SC47	不明	コムギ	1点	完形	自家同定		

[平成16年12月現在]

表7 東九州自動車道関連(都農~西都間)植物遺存体集成表

表8 縄文時代早期～後期旧石器時代相当層における各遺跡の状況(平成16年度調査分)

川南町域基本層序		川 南 町												
No.	略称 層名	八幡2	銀座1 (確認調査)	市納上1	天神本2	大内原	中ノ迫1 (一次)	中ノ迫1 (二次)	中ノ迫3	赤坂	国光原	湯牟田 (二次)	西ノ別府	尾花A
3	K-Ah 鬼界アカホヤ													
4	MB0 黒褐色ローム	P,Ar		P	P,Ar,Fl,SI		P,Ar,Fl				P,Ar,Gr,Ax		P,Ar,Fl	
5	ML1 暗褐色ローム	P,Fl,Co,SI	Ar,Sc,Co					P,Ar,Kn,Ka	P,Ar,Fl,Co		Fl,SI,He	SI		
6	Sz-S 桜島薩摩			Ar	(MB,MC)		SI	SI			MB,MC			Ar,FP,SI
7	ML1 褐色ローム													
8	Kr-Kb 小林軽石を含む層						MB,MC,Fl	Kn,Ka,Fl						PC
9	MB1 暗褐色ローム							Co,PC						
10	ML2 褐色ローム								Fl					
11	AT 始良Tn													
12	MB2 暗褐色ローム													
13	MB3 暗褐色ローム						Kn,An,Fl	Ax,Sc,Fl						
14	ML3 褐色ローム							Co,PC						
15	ML4 明褐色ローム													
16	Kr-lw イワオコシ													
17	明黄褐色ローム													
18	キンキラローム													
19	A-lw 始良岩戸													
20	Aso-4 阿蘇4													

凡 例


- ・P=土器、Ar=石鏃、MB=細石刃、MC=細石刃核、Kn=ナイフ形石器、Ka=角錐状石器、FP=剥片尖頭器、Tr=台形石器、TP=三稜尖頭器、Gr=磨石、Ha=敲石、Ax=石斧
- Sc=スクレイパー、An=台石、Fl=剥片、Co=石核、PT=礫塊石器、SI=集石遺構、He=炉穴、PC=礫群
- ・散礫は記入していない
- ・は礫層

※八幡第2遺跡、銀座第1遺跡については、平成16年12月末段階での成果

表8 縄文時代早期～後期旧石器時代相当層における各遺跡の状況(平成16年度調査分)

新富・高鍋町域基本層序		高 鍋 町		新 富 町			西 都 市			
No.	略称 層名	八幡2	野首2	南中原1	東畦原1(四次)	勘大寺	尾小原(三次)	藤山1(二次)	永牟田2	宮ノ東
5	K-Ah 鬼界アカホヤ									
6	MB0 黒褐色ローム	Ax		P,Gr,Ha,Fl,Co		Ar,Co		P,Ar,Gr,Ha,An	P,Ar,Fl,SI	
7	ML1 暗褐色ローム		P,Ar,Gr,Ax 上 An,Fl,Co,SI				P,SI	SI		
8	Sz-S 桜島薩摩		He	Fl,Co,PC						
9	ML1 暗褐色ローム		下 MB,PC							
10	Kr-Kb 小林軽石を含む層		Kn			MB,Fl			Fl,Co	
11	MB1 暗褐色ローム		Kn,Ka,Sc,PC		Kn,Ka,Tr,Gr,Ha Sc,Fl,Co,PC	Kn,FP,TP,PC				
12	ML2 褐色ローム		Fl,Co,PC							
13	AT 始良Tn									
14	MB2 暗褐色ローム		上 Kn,Tr,Fl,Co PC		上 Kn,Sc,Fl,Co Kn,Sc,Ha	Fl				
15	A-Fm 始良深港							An,Fl		
16	A-Ot 始良大塚									
17	MB3 暗褐色ローム		上 Kn,Tr,Fl,Co PC	調	Gr,Ha,An,Sc,Fl	Gr,Ha				
18	ML3 褐色ローム		下 PT,PC	査	Co,PT,PC					
19	Kr-Aw アフオコシ			中						
20	ML4 明褐色ローム									
21	Kr-Iw イワオコシ									
22	明黄褐色ローム									
23	キンキラローム									
24	A-Iw 始良岩戸									
25	Aso-4 阿蘇4									

凡 例

- ・P=土器、Ar=石鏃、MB=細石刃、MC=細石刃核、Kn=ナイフ形石器、Ka=角錐状石器、FP=剥片尖頭器、Tr=台形石器、TP=三稜尖頭器、Gr=磨石、Ha=敲石、Ax=石斧、Sc=スクレイパー、An=台石、Fl=剥片、Co=石核、PT=礫塊石器、SI=集石遺構、He=炉穴、PC=礫群
- ・散礫は記入していない
- ・は礫層

※南中原第1遺跡、永牟田第2遺跡については、平成16年12月末段階での成果

報告書抄録

ふりがな	ひがしきゅうしゅうじどうしゃどう (つの～さいとかん)
書名	東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書
副書名	
巻次	V
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第111集
執筆・編集担当者名	谷口武範　今塩屋毅行　森本征明　岡田　諭
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
発行年月日	2005年3月18日

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第111集

**東九州自動車道(都農～西都間)関連
埋蔵文化財発掘調査概要報告書V**

2005年3月18日

編 集 宮崎県埋蔵文化財センター
発 行 〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660
印 刷 有限会社 富士写真印刷
〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂字浮橋7418-2
TEL 0985(74)2179 FAX 0985(74)3066



繩文土器(下耳切第3遺跡)